ふるさとを学びのフィールドとした体験活動の試み
～　そば打ちボランティアを中心とする総合的な体験活動　～

宮城県北上町立相川小学校

◎　はじめに

子供たちは、生まれてから自分の家を中心として生活し、様々な経験を通してものの考え方や価値観を身に付けていく。そして、その大きな基盤となるものは、それぞれの子供たちが生まれ育った地域（ふるさと）の自然や社会、文化であり、そこでの原体験が子供たちの成長に大きく影響することは周知の通りである。

子供たちが、将来様々に変化する社会や国際社会に対応していく力を身に付けるためには、自分の考えや行動、そして生きる力の基盤となるべき、ふるさとの自然や社会をしっかりと見つめ、ふるさとに学ぶ機会を多く持つ必要がある。

本校では、「ふるさとを学びのフィールドに」を合言葉に、６年前より体験活動を中心とした総合的なふるさと学習を全校で実践してきている。ここではその一例として、第６学年の子供たちが行った、そば打ちボランティアを中心とした体験活動を紹介する。

１　地域及び本校の概要

(1)　地域の概要

本校のある北上町は宮城県の北東部、南三陸金華山国定公園の中心に位置し、美しい自然環境と伝統文化や歴史が豊富に残されている。地域の主産業は、ホタテやワカメを中心とした養殖漁業である。

(2)　本校の概要

①　児童数

児童数：　男　３８名　　女　３６名　　計　７４名

学級数：　各学年１学級　　計　　６学級

②　児童の実態

○　純朴、素直であり、最後まで一生懸命に活動に取り組むことができる。

○　学年が上がるにつれて、休日を家の中で過ごす子供が多くみられる。

○　ふるさとの自然や文化に興味を持っているものの、それを実際に体験するための手立てが分かっていない子供が多い。

２　本校での取り組み

(1)　本事業を進める上での基本方針

①　ふるさとを学びのフィールドとする

地域の自然、文化、歴史、人材・・・と、ふるさとには学びの素材が山ほどあると考え、子供たちの体験活動の場をふるさとに求める。

②　体験を通して考え、学ぶ

フィールドでの直接体験を重視し、さらにその体験を教科・領域など教育活動全般に積極的に関連させることで、子供たちの学びを深化発展させる。

③　学校全体で取り組み、互いに学び合う

各学年がそれぞれに設定したテーマに基づいて、年間を通した様々な体験活動を行っていく中で、子供、教師ともに互いに学び合っていく。

(2)　学校支援委員会について

本校では体験活動を行うに当たり、地域の様々な分野の専門家を「ふるさと学習講師」として委嘱し、協力を得ながら体験活動を行ってきている。

本事業における学校支援委員会は、これらのふるさと学習講師とは別に、以下のメンバーで①活動への助言　②活動への協力・支援　③地域への広報活動などを中心に活動を行っている。

◎学校支援委員会
- （学校）校長、教頭、教務、研究主任
- （地域）ＰＴＡ会長・顧問、漁協組合長、福祉協議会会長

3　活動の実際（対象学年・・・第６学年　男６名、女４名　計１０名）

(1)　今年度の６年生のふるさと学習

①　テーマ　：　ふるさとの風景　～ふるさとをいろいろな角度から見つめよう～

②　ねらい　：　これまでのふるさと学習を基に、個人及び全員で様々な角度からふるさとを見つめ、小学校でのふるさと学習のまとめをする。

③　主な活動：・個人研究（１年を通して自らの計画で行う）
・全体での活動…そば打ちを中心としたボランティア活動
竹炭を焼く活動
ヨシで篳篥（ひちりき）のリードを作る活動
ほか

(2)　そば打ちボランティア体験活動の実際

①　活動名：　出動！そば打ち隊

②　ねらい：　ソバの栽培から収穫、そば打ちまでの作業を体験するとともに、その体験を基にして、地域の高齢者を対象としたそば打ちボランティアの活動を行うことを通して、地域の自然や人々との関わりを考える。

③　教育課程上の位置付け

この活動は、１年間を通していくつかの異なる活動で構成されている。そのため、教育課程上の位置付けもいくつかの教科、領域などにまたがって設定した。

ア）ソバを栽培する活動　：　総合的な学習の時間、創意
イ）ソバの観察　：　理科、総合的な学習の時間
ウ）ソバの収穫・製粉　：　総合的な学習の時間、家庭科
エ）そば打ち　：　総合的な学習の時間、家庭科
オ）福祉施設訪問　等　：　学級活動、総合的な学習の時間、道徳

④　体験活動の内容

この体験活動は、ソバの栽培をきっかけとして、最終的にボランティア体験まで、１年をかけて一つの活動を発展させていく内容になっている。

ア）ソバの栽培体験（品種・・・高嶺ルビー、信州大そば）

(ｱ)　ソバの種まき（夏ソバと秋ソバの連作）

一般に栽培されている白花ソバと、あまり栽培されていない赤花ソバの２種類を春と秋の２回に分けて栽培する連作を行った。このことが、後に大変救われる結果となった。

(ｲ)　ソバの栽培～収穫（７月下旬～１１月中旬実施）

ソバの花の「短花柱花」と「長花柱花」の２種類の花を観察し、なぜ２種類の花があるのか、各自が様々な方向から調べた。

花が咲くまでは順調だったが、結実の時期に危機的な状況が訪れた。８月の長雨で日照時間が少なかった上に、台風の直撃を受け、夏ソバはほとんど全滅に近い打撃を受けた。子供たちもショックを受けていたが、幸い秋ソバとして赤花ソバをまいていたため、何とかある程度の量を収穫することができた。この経験から、子供たちは自然を相手にする農業の厳しさとともに、その被害をできるだけ小さくしようと工夫してきた先人の知恵に感心していた。

赤ソバの花を観察する

イ）脱穀・製粉体験（１０月下旬～１２月上旬実施）

地域の方から譲り受けた石臼を使って製粉した。

貴重な赤花ソバの実を一粒も無駄にしないように石臼に入れていた。

石臼で製粉する

ウ）そば打ち体験（１２月上旬～下旬実施）

製粉したそば粉を使って、初めてのそば打ち。そば打ちの方法を講師の方に教わったが、最初は小指の太さ程もある「どじょうそば」になってしまった。とてもお年寄りの方にはご馳走できないと、その後練習を重ね、見事に打てるようになった。

エ）そば打ちボランティア体験（１月中旬～２月中旬実施）

いよいよ町の高齢者福祉施設「はまぎく」にそば打ち訪問した。お年寄りの目の前で自分たちでそばを打ち、ゆで、召し上がって頂いた。会場作りも全部自分たちでやった。みなさんが「おいしい」と言って下さり、普段食欲のない方が「おかわり」までして下さったことに子供たちは、言葉に表せない満足感を持つことができた。

お年寄りの目の前でソバを打つ

おかわりまでして下さった

最初は恥ずかしさからうまくお年寄りと話せなかった子供たちだが、次第に子供の目線がお年寄りと同じ高さになり、世間話までするようになった。また、和太鼓を演奏したり、自分たちで作った篳篥（ひちりき）で雅楽も演奏した。体の不自由なお年寄りの方が一生懸命手拍子をして下さったり、涙ぐむお年寄りの姿に、子供たちの心がしっかり揺り動かされたこ

とが、その後の作文などから十分にうかがうことができた。

子供の目線が次第にお年寄りと同じになる

子供の演奏に手拍子をし、涙ぐんで下さった

⑤　活動の評価方法

それぞれの活動毎に、学習カード、自己評価カード、作文作品などを集積して子供の変容を評価するとともに、活動内容等について評価を行った。また、活動中の子供の「気づき」をできるだけ記憶しておき、それを記録・集積することによる評価を行った。

4　活動の成果

(1)　体験の場を地域に求めたことにより、地域の持つ教育力を発掘し、それを十分に生かした体験活動を行うことができた。

(2)　ソバは子供たちの体験活動の素材として、種まきから収穫、そして施設訪問でのそば打ちまで、全て子供たち自身の手で行うことができる素材であるとともに、連続性と発展性のある優れた素材であることが分かった。

(3)　本事業に関わる、ソバを中心とした活動だけでなく、それ以外の竹炭を焼く活動や北上川のヨシで篳篥（ひちりき）のリードを作って演奏する活動など、他の活動と関連させたことで、より深まりと連続性のある体験活動となった。

(4)　高齢者福祉施設のそば打ち訪問では、高齢者への礼儀、対応、意識などはもちろん、そば打ちの際の衛生面、そばの太さ、ゆで加減など、子供たちは様々な配慮をしなければならず、6年生の総まとめの体験活動としてふさわしいものとなった。

5　今後の課題

(1)　子供たちが体験した内容や成果と、他の様々な教科や領域の学習との関連を、今後より一層図り、体験活動と教科の学習が相互に補完し合えるような方策を検討していく必要がある。

(2)　ソバ等の栽培は台風や長雨等多分にその年の天候に左右されてしまう。そういった失敗の体験ももちろん重要であるが、今回のように夏ソバ、秋ソバの連作を行うなど、ある程度の収穫量を確保する手立てを考えておく必要がある。

(3)　高齢者福祉施設へのそば打ち訪問は、大変に喜ばれ、子供たちにとっても学ぶことの多い実りある体験活動となったが、今後さらにこういった施設との継続した交流の方法を検討していく必要がある。

◎　おわりに

子供たちのふるさとをフィールドとして、「ソバ」というひとつの素材にこだわることで、様々な形で体験活動を深化発展させることができた。子供たちは、高齢者福祉施設の訪問で、くたくたになりながらも、全員が「行ってよかった。」と目を輝かせた。今後もふるさとの素材の教材化を進め、子供たちに豊かな体験をさせていきたいと思う。